

際立つと考えたからである。

講演にはボローニャ大学博物館やこれまで交流を重ねてきたボローニャ大学の教員の方々が広報して下さったおかげで 70 名の聴衆が集まった。大変熱心に講演を聞いていただき、終了後には着物の値段に関するものや、今回言及しなかった着物の文様に関する質問なども投げかけられた。

講演会場は東洋美術研究所のコレクション展示室の隣室であり、終了後に聴衆は隣の展示室に移動して思い思いに展示を話しながら見ていた。おそらく、それ



講演会「着物の文様に見る日本人の願い」

までは注目することのなかった浮世絵に描かれた着物の細部に目を向けて、それが何かなどを話していたのだらうと思われる。日本美術に対するさらなる理解を深めるという点はある程度成功したのだと思われる。

そして、この事業を通して見えてきたことは博物館資料の活用とは、必ずしも館蔵資料に限らないということである。博物館において収蔵資料に関する情報は目録や図録、現代においてはデータベースやデジタルアーカイブなどで、社会に対して公開し、さまざまな人々の利用に供することは博物館活動の基本である。資料は活用する人によってさまざまな面が引き出される。そのためにより多くの人々がアクセスできるようにしなければならない。所蔵機関にこだわらず、さまざまな人が活用できるようにすることが基本であることを改めて認識した。

今後もボローニャ東洋美術研究所およびボローニャ大学博物館における日本美術の普及活動を継続し、ボローニャにおける日本美術コレクションの価値を高めていく予定である。

## 《調査研究活動》

### 国際シンポジウム

佐藤 琴（附属博物館学芸研究員）

#### 1. 概要

事業名：国際シンポジウム「大学と美術の可能性を求めて」

開催日時：2017年10月14日（土）13:30～17:00

場所：人文社会科学部 103 教室

#### 【プログラム】

基調報告：「大学におけるアート・リソースの活用に関する研究」

五十殿利治（筑波大学芸術系 特命教授）

代読 後小路雅弘（九州大学人文科学研究院 教授）

事例報告：「ボローニャ大学博物館の取り組み」

ロベルト・バルツァーニ氏

（ボローニャ大学（イタリア）正規教授・ボローニャ大学博物館システム 総責任者）

代読 山本陽史（山形大学学術研究院教授）

事例報告：「山形大学附属博物館について」

佐藤琴(山形大学学術研究院 准教授)

事例報告：「東亜大学石堂博物館について」

池江伊(東亜大学石堂博物館(韓国) 学芸士)

ディスカッション

参加人数：30人

## 2. 小括

本シンポジウムにおける海外ゲストの2つの報告については科学研究費補助金 基盤研究 A 大学における「アート・リソース」の活用に関する総合的研究の平成29年度報告書『ユニヴァーシティ・アート・リソース研究3』に掲載した。内容についてはそちらをご参照いただきたい。本稿ではシンポジウムの成果について述べたい。

まず、本シンポジウムで再認識することができたことは、世界最古の大学であるボローニャにおいても、東亜大学石堂博物館のように国宝をも含んだコレクションを有し、日本統治下の建物をわざわざ購入して博物館として整備し積極的に活動を進めている館でも、博物館活動に対する大学当局の理解は十分とはいえず、予算や人員などの点が厳しいということである。

そして、展示の刷新や教育普及プログラムを幅広く実施することによって、大学博物館の存在意義を内外にアピールしている点である。博物館の展示および教育機能をとおして、その存在意義をアピールすることは日本だけの状況ではなく、海外の大学博物館においても共通の課題であることがわかった。

社会における大学博物館の認知は未だ十分ではなく、我々は一層の普及に努めていかなければならない。その取り組みの一つとして大学博物館が所在する地域を巻き込んだかたちでの国際的な大学博物館同士の連携は有効だと思われる。

大学博物館は地域文化の拠点となりうるポテンシャルを秘めている。しかし、そのことは未だ市民には浸透していない。市民の大学博物館への理解を深めるためには、やはり、市民とともに地域の課題に取り組むことが必要ではないだろうか。ボローニャ大学博物館も東亜大学石堂博物館も市民へのきめ細やかな教育活動を実施することによって地域の課題に取り組み、それによって市民の信頼を勝ち得ようとしていた。これらの事例にならい、山形大学附属博物館も市民と協働し、信頼関係を構築し、地域文化の拠点として内外に知られるようになることが必要である。



国際シンポジウム ディスカッション